転換期の社会と大学 ㊥

学びの目標 自ら設定

単位や定員管理見直し ■ 社会人教育に可能性

新型コロナウイルス下で大学教育の形が模索されている。法政大学の田中優子総長は学生の評価を「学び」に軸足を置いたものに転換し、単位制度や定員管理も見直すよう提言する。

田中 優子
法政大学総長

世界中の大学にとって昨年は試練の1年であった。突然、教室で授業ができなくなった。問題はそれだけではなかった。

大学は授業のためにのみ存在するわけではない。あらゆる活動を通じて多様な人と人が言葉はもちろん、五感全てで互いの情報をやりとりする。その中で新たな自分に気づき、自分を育てる。大学だからこそ得られるその機会を失うことは学生のみならず、教員にとっても痛恨の極みだ。

法政大学は2021年度の授業について、感染拡大防止策を最大限講じながら、対面授業を基本にすることを決めている。授業科目の特性を踏まえ、対面とオンラインを組み合わせる「ハイブリッド型授業」、対面授業をオンラインで同時配信する「ハイフレックス型授業」など、柔軟な授業設計に取り組む。とりわけ急きょ導入したオンライン教育については、さらなる質の向上が必要だ。

そして大規模・中規模授業のオンデマンド化である。新型コロナウイルス感染症の拡大防止策を講じて座席設定をすると、大・中規模の授業を開講できる教室を十分に用意することができず、オンデマンドに切り替えざるを得ない。さらに昼食時や構内での会話、課外活動などの際の感染を防ぐため、キャンパスごとに出入りする人数を制限している。

□ □ □

昨年12月、文部科学省は各大学の対面授業の割合と対策を公表した。文科省に注意喚起されるまでもなく、対面の価値は十分に分かっている。それでも都心の大規模大学が対面授業の割合を一定程度以上増やせないのは、前述の理由による。

さらに課外活動も大学の重要な側面である。本学は11月初旬、一部のキャンパスにおいて対面で大学祭をおこなった。学生が精神的に追いつめられているという報告を受けたからである。

大学祭は学生が企画する。学生たちは感染防止を徹底して実施した。その後感染の報告はなく、多くの学生が大学という拠点を実感できた。

実は「学び」の本当の課題は対面かオンラインかの二者択一ではない。文科省と大学はともに、真に必要な「学びのしくみ」とはどういうものなのかを、今こそ考える必要がある。

第1は、「人が成長する上で、他者と関わることがいかに大切か」を改めて認識し、関わる機会を積極的につくり出すことである。対面による関わりもあれば、オンラインによる関わりもある。オンライン・オンデマンドの定着によって、今まで緩慢にしか進まなかったリカレント教育、つまりあらゆる年齢層の人々が大学や大学院で学べる方法が広がる可能性が出てきた。

法政大学ではすでに多くの社会人が学んでいる。卒業ではなく履修証明を発行できるプログラムもある。今後オンラインも対面も選択できるようになれば、働きながら複数の学位をもち、新たな仕事の資格を得ることができる。地方と都心、異国の大学どうしの大学間連携も容易になる。

その場合は、個々の大学や学部の特徴が明確であることが連携を豊かなものにする。その地域独自の研究や教育、その大学ならではの履修科目があれば、学生は連携のなかで学び、複数学位の獲得も夢ではない。多様な対面の機会や横のつながりをつくる仕組みをもつことで、より広い範囲での偶然の出会いや体験が可能となる。

第2は、「教えることから学ぶことへ評価の視点を移す」ことだ。従来は教えることに軸足を置いてきた。しかし大学は個々の人間が「自ら学ぶ」場所なのである。

法政大学では新任教員研修会のときに副学長が「熱血先生にならないように」とくぎを刺す。私は本学出身だが、学部でも大学院でも主体的に学び、それを教員がサポートする方法が浸透していることを実感してきた。

しかしそれでも単位の考え方が時間と回数で成り立っていることに変わりはない。オンデマンド授業になったら、その時間をどう考えるのか。今までの授業は場所と時間を大学側で設定し、そこにいさせるという教える側の管理で成り立っており、出席回数と試験やリポートで単位を認定した。

そうではなく、学ぶ側が教員と相談しながら自分の目標と学び方を決め、自ら目標を達成することで単位を認定する方法があってもよい。

本学ではコロナ禍でアルバイトを失った学生への経済支援を兼ねて、アシスタント制度を使ってオンライン授業の運営に多くの学生を学内雇用した。教師と学生だけでなく、個々の学生の相談に乗る「先輩」たちがいるのは非常に有効だ。デジタル社会だからこそ、個々の学びの進捗を複数の人間が共有しながらサポートできるのである。

□ □ □

コロナ禍の体験を経て新たな大学の姿が見えてきた。もっとも大事なことは個々の学生が「学び得ている」ことだ。つまり、自らが目標とした力を確実につけていると実感し、その充実を自信に転換できることである。

そのためにはまず、学ぶ側に軸足を置いた単位の認定方法を開発し、その実質化のために卒業単位数を減らす。そして大学空間を柔軟に変えられるものとし、定員管理の基準を入学定員から収容定員へ、学部単位から大学全体に変えることで学生の学ぶ期間を多様化する必要がある。大学設置基準を考え直すときがきている。

大学設置基準などの規定

＜授業の設計＞
1単位当たり標準で45時間の学修が必要。この中には授業外の予復習も含む

＜卒業単位数＞
4年以上在学し、124単位以上を取得。医学科などは6年以上、188単位以上

＜定員管理＞
入学定員の超過、未充足に応じて補助金減額などのペナルティーがある
大学全体の収容定員は学科・課程単位で学部ごとに定める

＜校地面積＞
学生1人当たり10平方㍍として算定